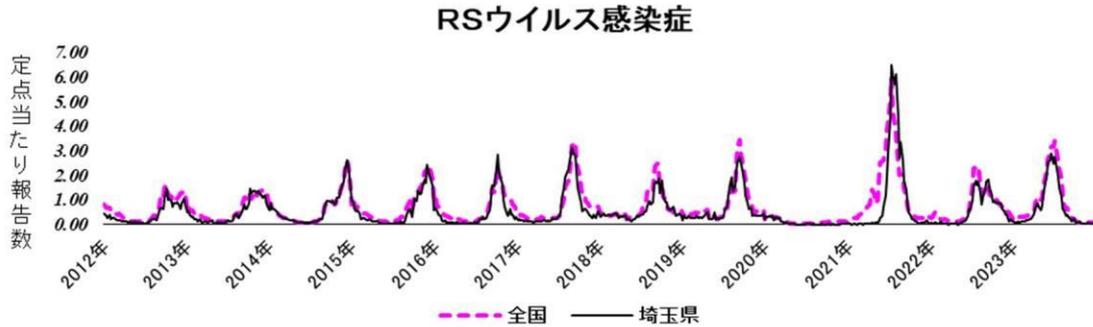


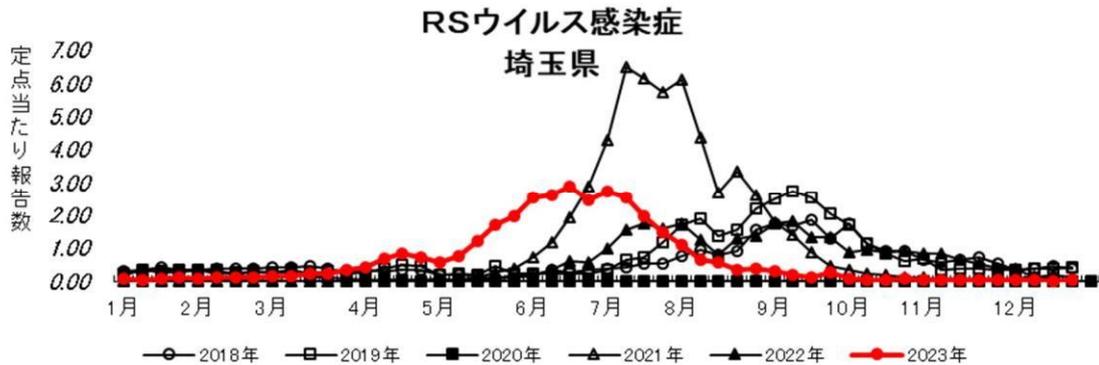
3 小児科定点把握対象疾患の動向

1) RSウイルス感染症

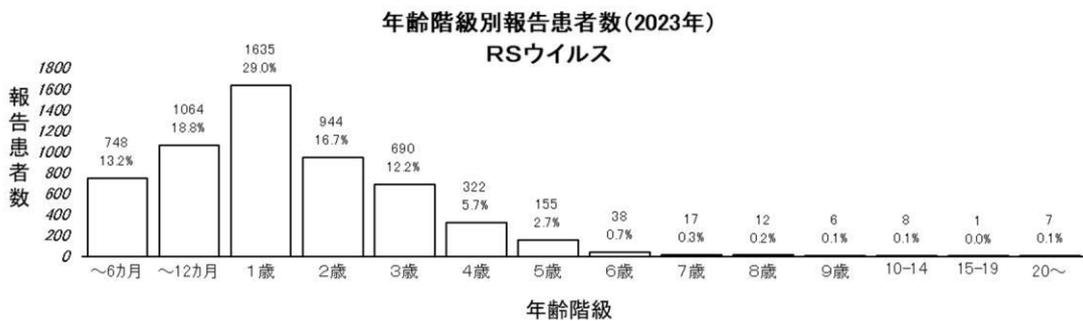
2023年第1週～52週の累積報告患者数は5,647人であった。定点当たり報告患者総数35.07は前年を上回った。定点当たり報告数は3月下旬から増加し始め、8月まで多い状態が続いた。第25週(6/19-25)に観察された定点当たり報告数の最大値2.87は前年の最大値を上回った。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く、2歳未満が全体の61.0%であった。



図Ⅱ-2-1 定点当たり報告患者数の年推移(全国比較:RSウイルス感染症)



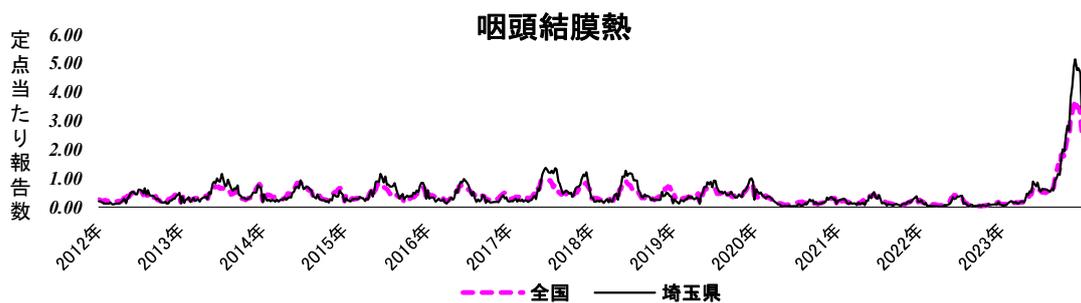
図Ⅱ-2-2 定点当たり報告患者数の推移(埼玉県:RSウイルス感染症)



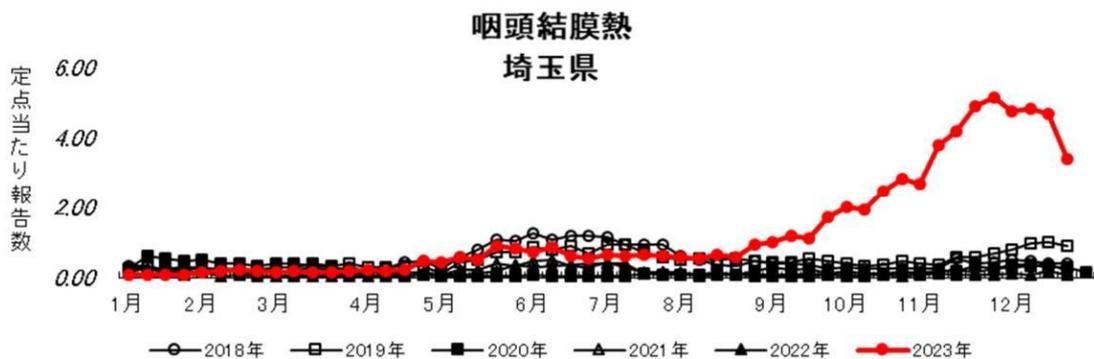
図Ⅱ-2-3 年齢階級別報告患者数(埼玉県:RSウイルス感染症)

2) 咽頭結膜熱

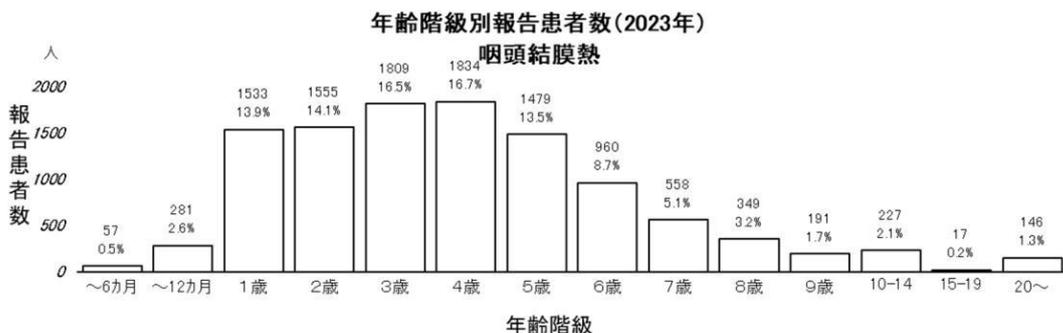
2023年第1週～52週の累積報告患者数は10,996人であった。定点当たり報告患者総数68.30は前年と比べ著しく増加した。夏季流行は第21週(5/22～28)から第24週(6/12～18)にかけてやや高い水準となったが、例年に比べやや小規模であった。冬季流行は夏季流行が終息しないまま、8月下旬に増加し始め、12月まで非常に多い状態が続いた。定点当たり報告患者総数及び第48週(11/27～12/3)に観察された定点当たり報告数5.15は、感染症法に基づく調査が開始された1999年以来、最大であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳～5歳が全体の74.6%で、特に3歳及び4歳が多かった。



図Ⅱ-3-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：咽頭結膜熱）



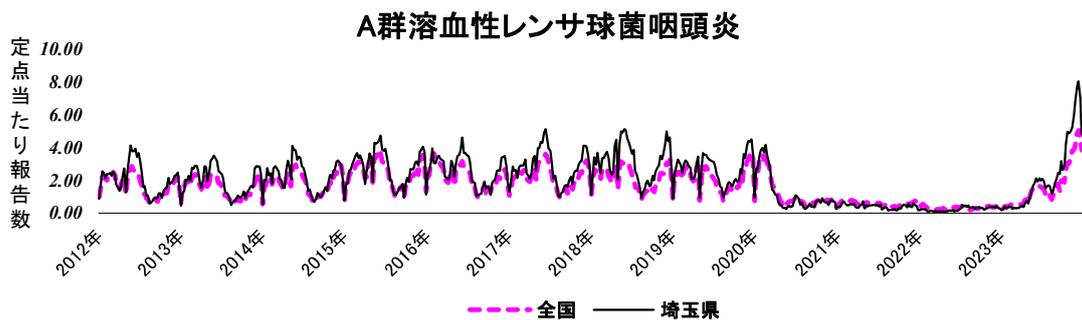
図Ⅱ-3-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：咽頭結膜熱）



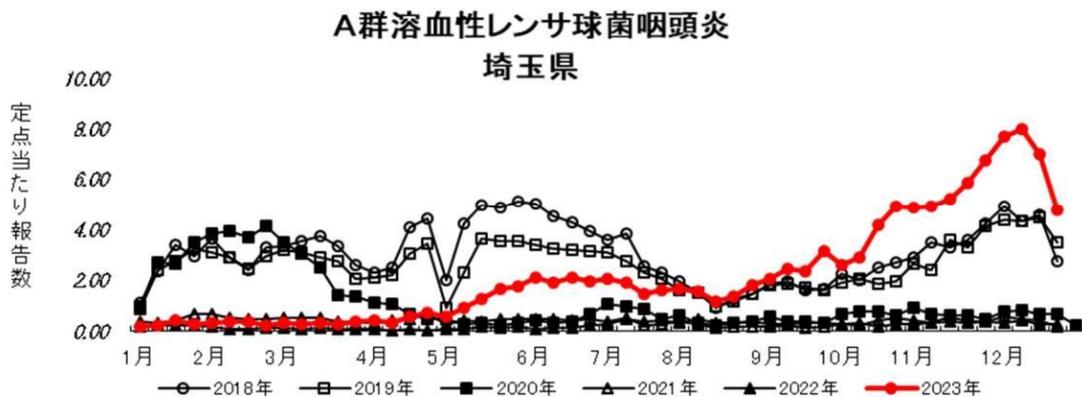
図Ⅱ-3-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：咽頭結膜熱）

3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

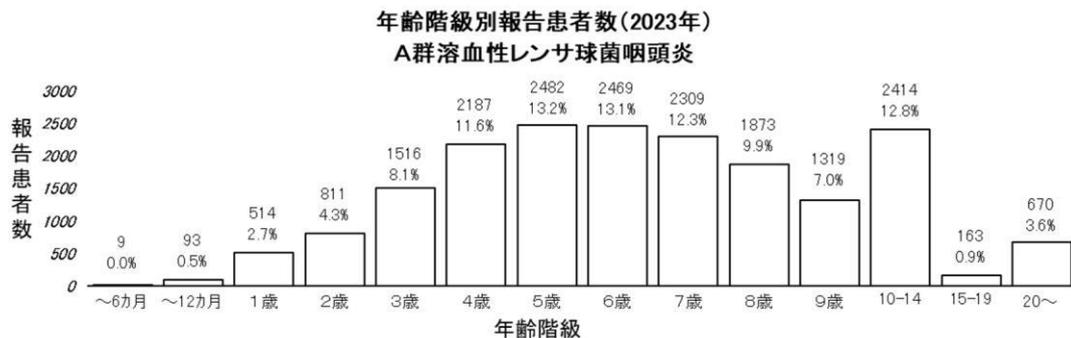
2023年第1週～52週の累積報告患者数は18,829人であった。定点当たり報告患者総数116.95は前年と比べ著しく増加した。定点当たり報告数は、1月から3月は過去2年と同様に低い水準で推移したが、4月に増加し始め、6月から7月にかけて報告数がやや多い状況が続いた。その後、いったん減少したものの8月下旬に再び増加し始め、10月～12月に大規模な流行が確認された。第50週(12/11～17)に観察された定点当たり報告数8.04は、感染症法に基づく調査が開始された1999年以来、最大であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、5歳が最も多く、3歳～8歳で全体の68.1%であった。



図Ⅱ-4-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）



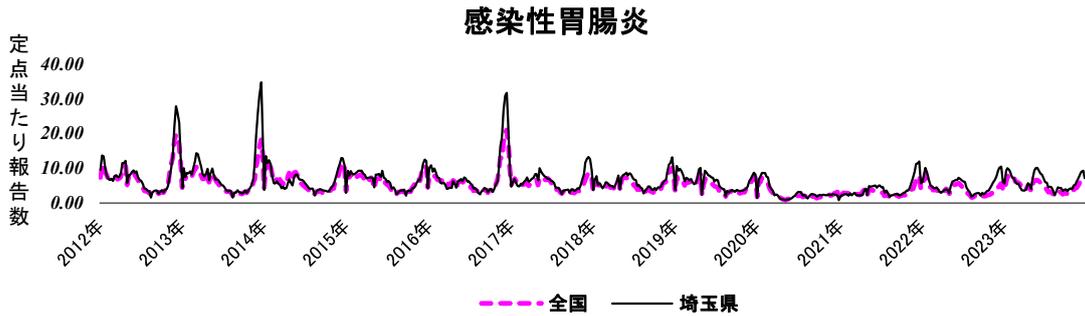
図Ⅱ-4-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）



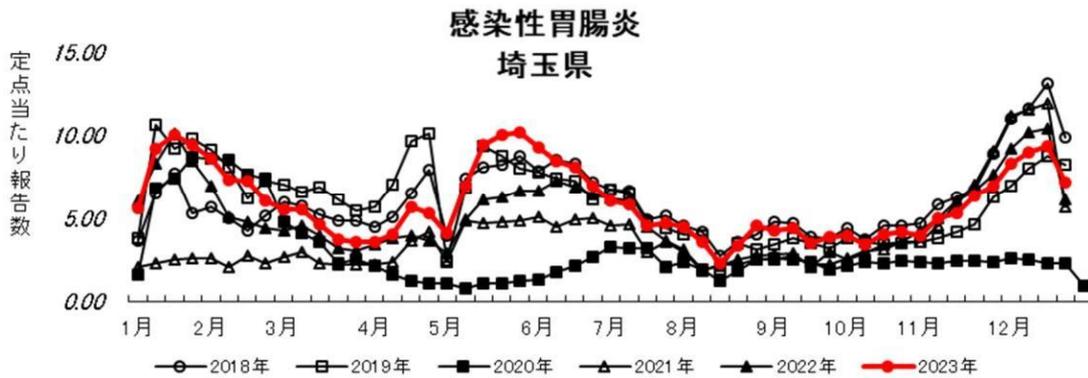
図Ⅱ-4-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）

4) 感染性胃腸炎

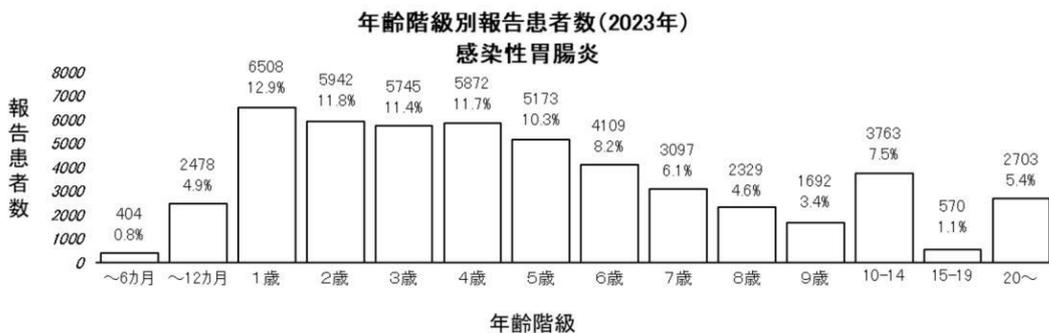
2023年第1週～52週の累積患者報告数は50,385人であった。定点当たり報告患者総数312.95は前年と比べ増加した。夏季流行は5月～6月にかけて確認され、例年に比べやや大きな流行となった。冬季流行は11月以降に緩やかに始まり、第51週(12/18～24)に定点当たり報告数9.35のピークを形成した。定点当たり報告数の最大値10.18は第22週(5/29～6/4)に観察され、前年の最大値(10.44)を下回ったものの、夏季の流行としては例年に比べて多かった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く、6歳以下が71.9%であった。



図Ⅱ-5-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：感染性胃腸炎）



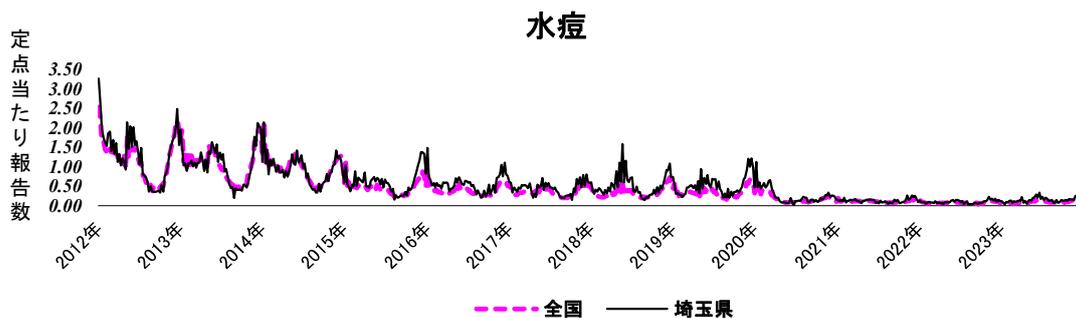
図Ⅱ-5-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：感染性胃腸炎）



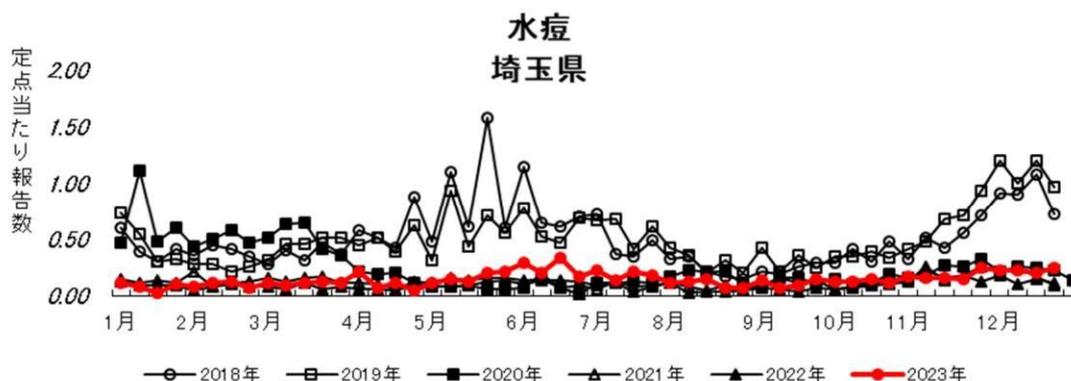
図Ⅱ-5-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：感染性胃腸炎）

5) 水痘

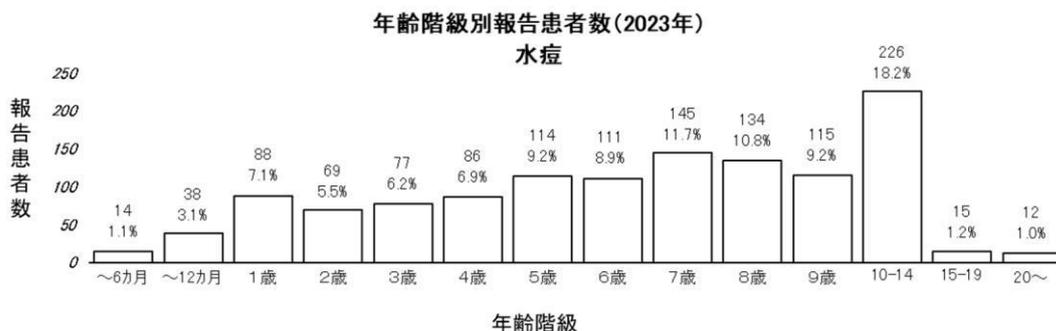
2023年第1週～第52週の累積報告患者数は1,244人であった。定点当たり報告患者総数7.73は前年と比べ増加した。2023年の定点当たり報告数の最大値は第25週(6/19～25)の0.34で、2020年4月以降0.50を下回る水準で推移している。年齢階級別では全ての階級で報告があり、7歳が最も多かった。



図Ⅱ-6-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：水痘）



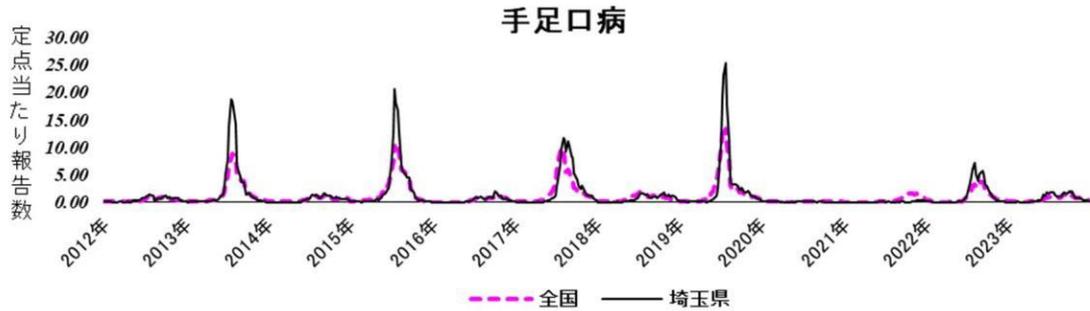
図Ⅱ-6-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：水痘）



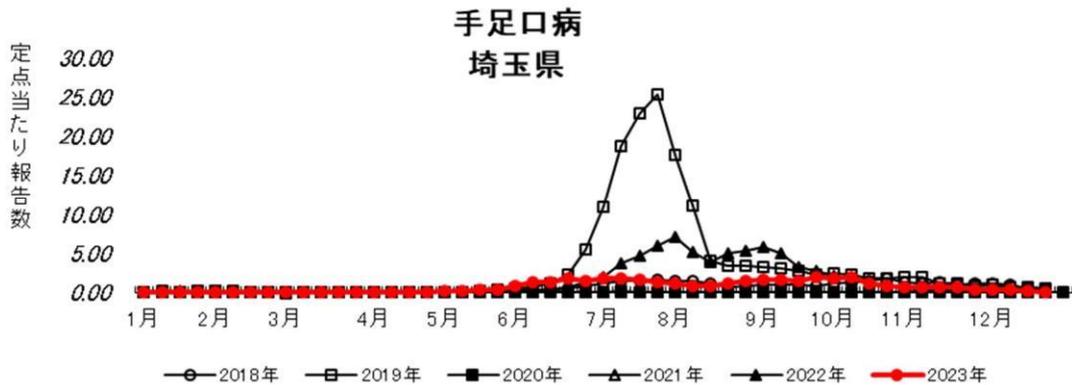
図Ⅱ-6-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：水痘）

6) 手足口病

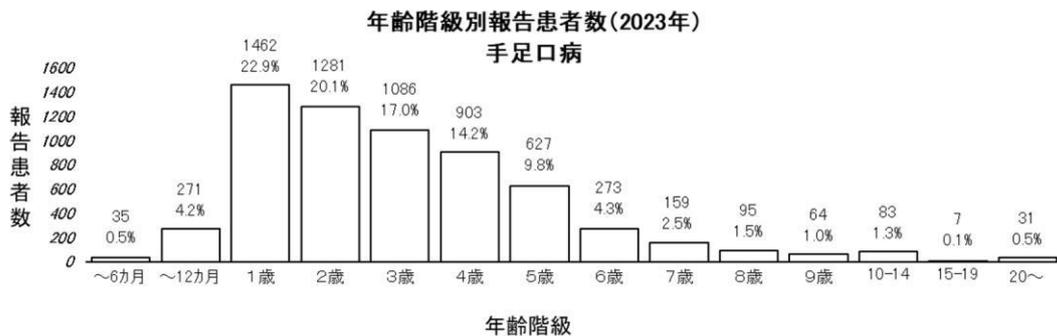
2023年第1週～52週の累積報告患者数は6,377人であった。定点当たり報告患者総数39.61は前年と比べ減少した。流行は5月に始まり、10月まで及んだ。定点当たり報告数の最大値は第39週(9/25～10/1)の2.04で、小規模な流行であった2016年及び2018年の最大値(2.03、1.87)と同水準であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く1歳～4歳で全体の74.2%であった。



図Ⅱ-7-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：手足口病）



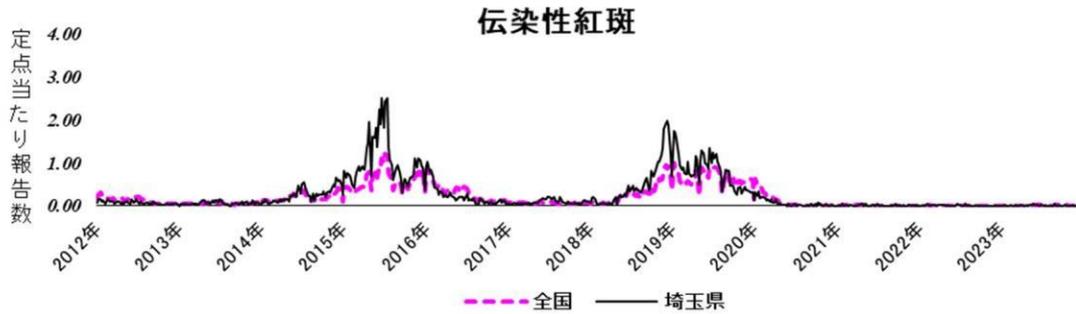
図Ⅱ-7-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：手足口病）



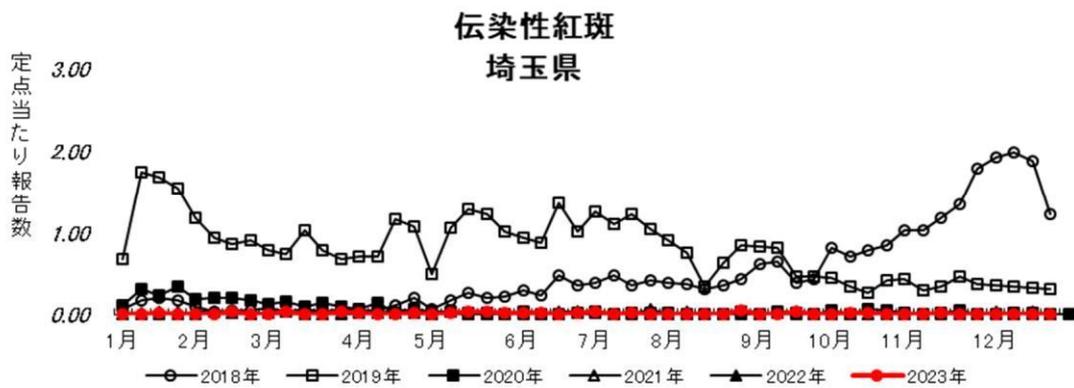
図Ⅱ-7-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：手足口病）

7) 伝染性紅斑

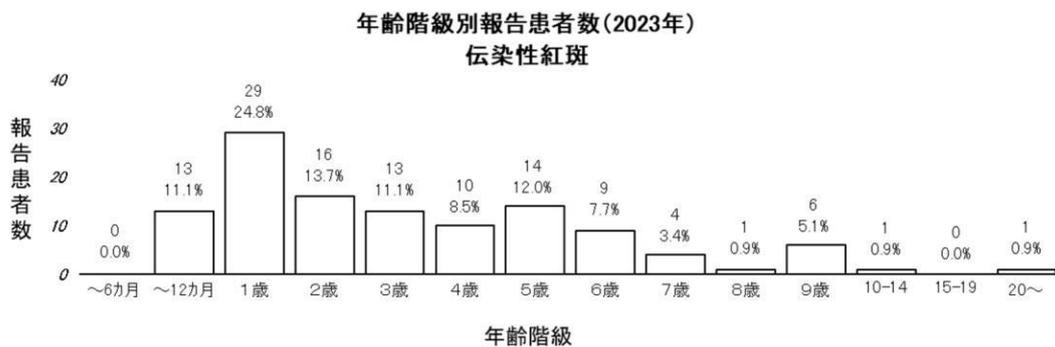
2023年第1週～52週の累積報告患者数は117人であった。定点当たり報告患者総数0.73は前年と同水準であった。定点当たり報告数の最大値は第35週(8/28～9/3)の0.05で、年間を通して際立った報告数の増加は観察されなかった。年齢階級別では1歳が最も多く、次いで2歳と続いた。



図Ⅱ-8-1 定点当たり報告患者数の年推移（国比較：伝染性紅斑）



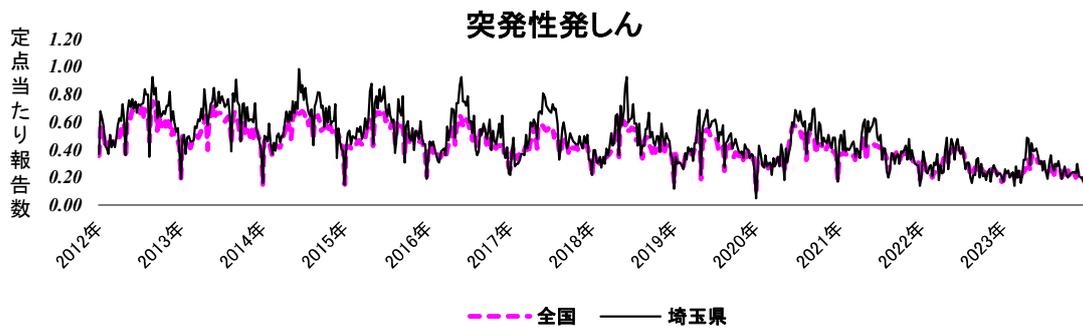
図Ⅱ-8-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：伝染性紅斑）



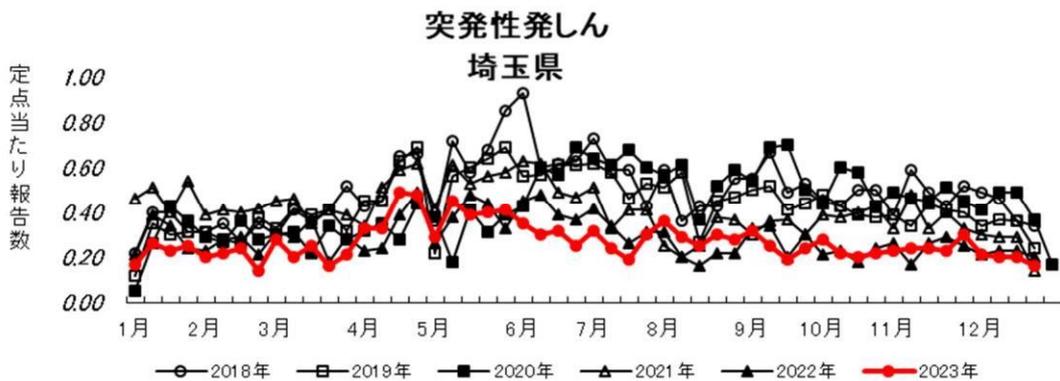
図Ⅱ-8-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：伝染性紅斑）

8) 突発性発しん

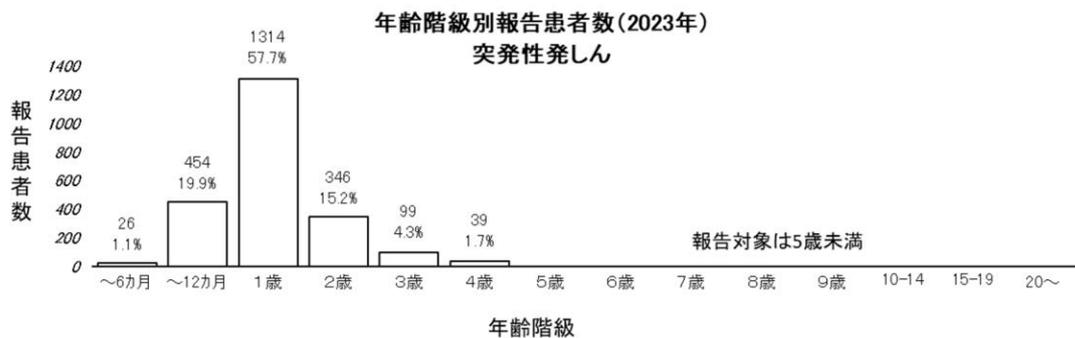
2023年第1週～52週の累積報告患者数は2,278人であった。定点当たり報告患者総数14.15は前年と同水準であった。定点当たり報告数は4月～5月は例年同様の動向が観察されたが、1月～3月及び6月以降は例年よりやや少ない水準で推移した。定点当たり報告数の最大値は第16週(4/17～4/23)の0.49であった。年齢階級別では、例年同様に1歳が最も多く、2歳未満で全体の78.7%であった。



図Ⅱ-9-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：突発性発しん）



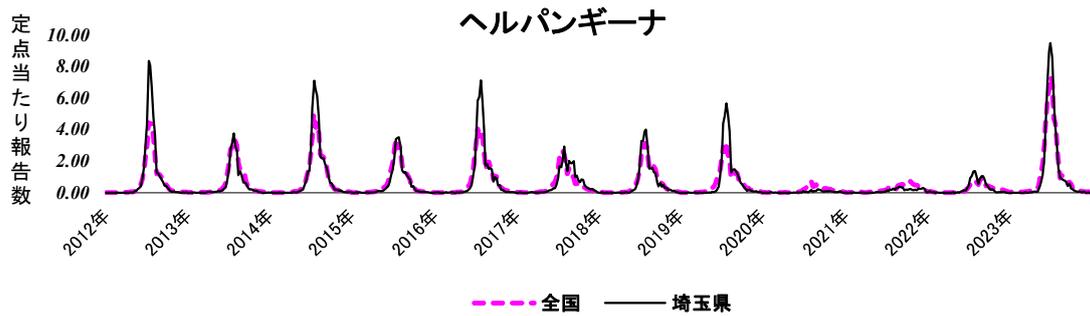
図Ⅱ-9-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：突発性発しん）



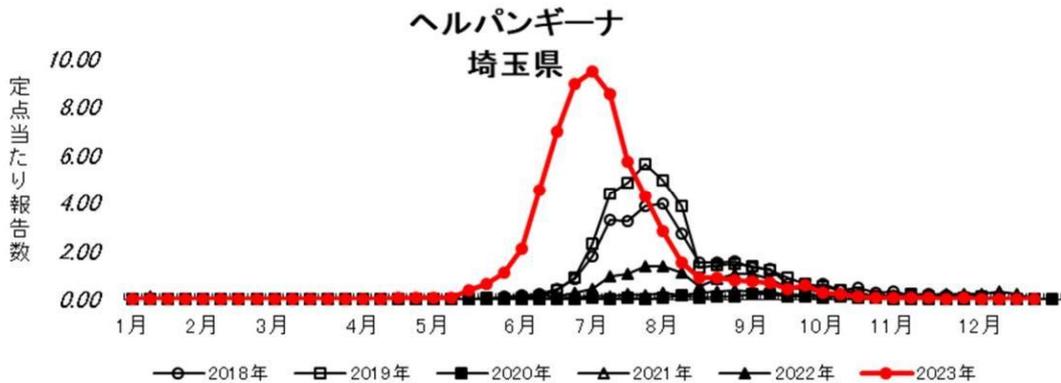
図Ⅱ-9-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：突発性発しん）

9) ヘルパンギーナ

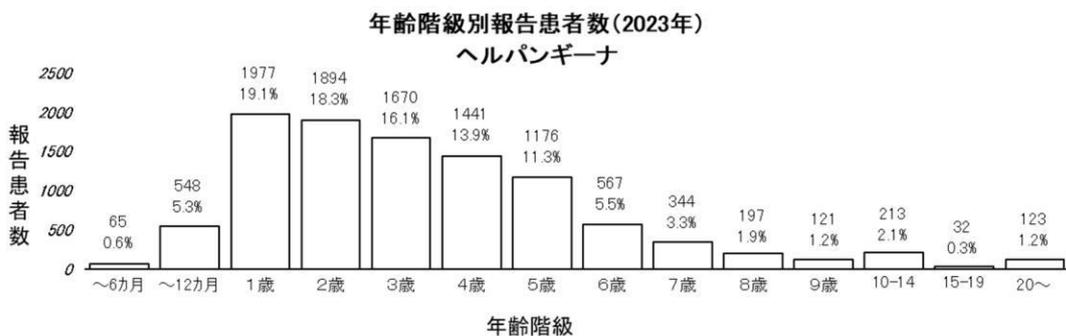
2023年第1週～52週の累積報告患者数は10,368人であった。定点当たり報告患者総数64.40は前年と比べ著しく増加した。定点当たり報告数は5月から増加し始め、第27週(7/3～9)に最大値9.47を観察した流行が確認され、9月までやや多い状態が続いた。流行の規模は過去10年と比較して、定点当たり報告患者総数、定点当たり報告数の最大値ともに最も大きな流行であった。年齢階級別では全ての年齢階級で報告があり、1歳が最も多く、1歳～3歳で全体の53.4%であった。



図Ⅱ-10-1 定点当たり報告患者数の年推移(全国比較:ヘルパンギーナ)



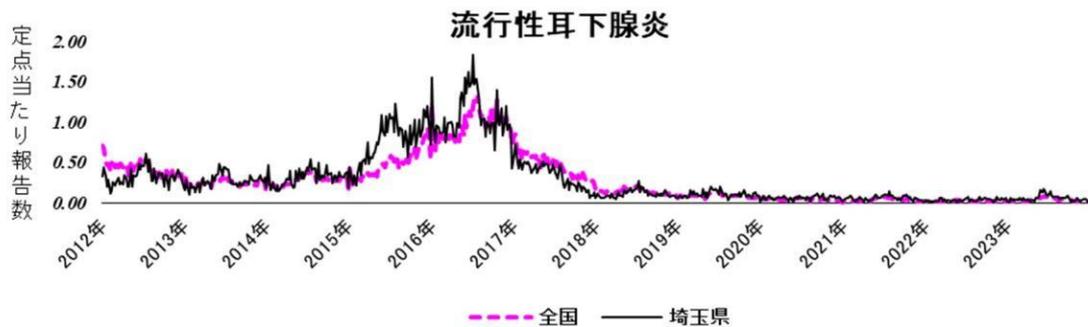
図Ⅱ-10-2 定点当たり報告患者数の推移(埼玉県:ヘルパンギーナ)



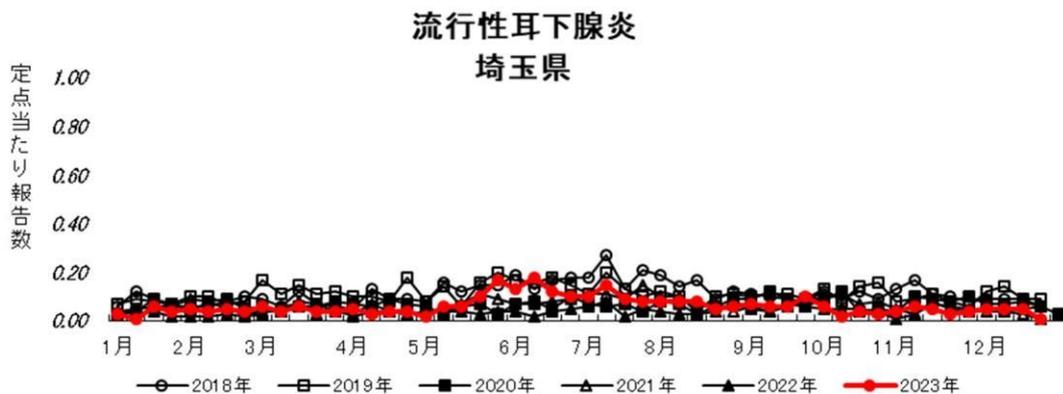
図Ⅱ-10-3 年齢階級別報告患者数(埼玉県:ヘルパンギーナ)

10) 流行性耳下腺炎

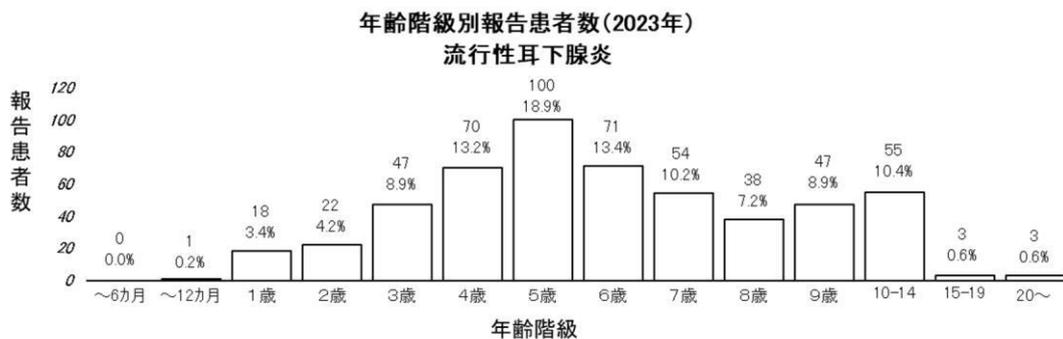
2023年第1週～52週の累積報告患者数は529人であった。定点当たり報告患者総数3.29は前年と同水準であった。定点当たり報告数の最大値は、第24週(6/12～18)の0.18で、年間を通して際立った報告数の増加は観察されなかった。年齢階級別では6か月未満を除く階級で報告があり、5歳が最も多く、次いで6歳、4歳と報告数が多かった。



図Ⅱ-11-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：流行性耳下腺炎）



図Ⅱ-11-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：流行性耳下腺炎）



図Ⅱ-11-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：流行性耳下腺炎）